2025 年度

# SGT　活動レポート

# Global Communication E.W.Clark と W.E.Griffis

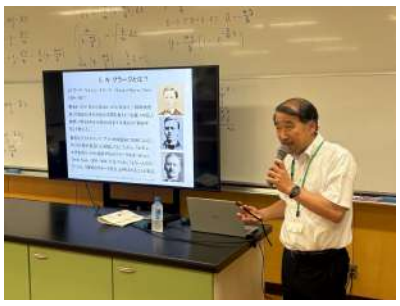
6 月 21 日(土)に今年度第 1 回となる SGT Global Communication が開催されました。中学生 1 名、高校生 5 名、保護者 2 名が参加しました。講師は、静岡大学名誉教授今野喜和人先生です。今回は、E.W.Clark と W.E.Griffis～お雇い外国人が見た静岡～と題してご講演いただきました。先生の講演は、今回 2 回目となりますが、前回ご講演いただいたテーマ、『E.W.Clark と静岡学問所』の続編となるものです。Griffis に対して Clark が書いた手紙がアメリカの New Jersey にある Rutgers University の図書館に保管されています。福井大学はその一部のコピーを図書館で保存していることからこれを今野教授と有志で日本語に翻訳しました。そして今回、その研究の成果を生かし Clark が日本に教師として赴任した経緯についてのいきさつを中心に講義を進められました。Edward Warren Clark は、駿府藩が旧幕臣の教育のために作った静岡学問所で「お雇い外国人教師」として物理化学、Clark は、アメリカの New Jersey にある Rutgers University を卒業し 22 歳という若さで日本にやってきました。この大学はアメリカがまだイギリスの植民地であった頃作られた全米で 8 番目に古い大学で慶応 3 年から明治 30 年までの約 30 年間に 300 名近くの日本人留学生が学びました。現在は州立大学となっている同大学ですが、Clark はこの大学で学生時代に藩命によってアメリカに留学し、学んでいた優秀な武士の若者たちと出会いました。彼らは、将来の藩政を担うことを期待され、寸暇を惜しんで勉強をしていました。なかには 3 年間首席で成績優秀であった越前福井藩士の日下部太郎もいました。日下部は、卒業を 1 ヶ月後に控え病に倒れ、当地で亡くなりました。日下部のように勤勉で礼儀正しい当時の日本人留学生と接する中で Clark は日本に行ってみたいという強い思いを抱くようになります。

明治 3(1870)年、大学の同窓生であり Clark の親友でもあったが Griffis が福井藩の藩校、明新館に赴任することになりました。恋人との辛い破局と家族を支えなくてはならないという経済的な苦境の中で破格の給料でしかも教師として雇ってくれる日本行きを Griffis は選び、そこで理化学(物理・化学)を教えることとなりました。先を越されることになった Clark はあせりますが、やがて日本で優秀な外国人教師を探しているとの情報が彼の耳に入ります。明治 2(1869)年、「府中」から「静岡」と名前を改めた府中駿府藩は、明治 4(1871)年の廃藩置県によって静岡県となり、その幹事役を勝海舟(安房)が勤めていました。押し寄せる新しい時代の波の中で静岡学問所の一等教授であった中村正直は、勝に外国人教師の採用を進言します。そこで勝は、福井県の明新館に赴任していた Griffis に同じ大学出身で優秀な教師を推薦して欲しいと依頼します。そこで Griffis は、同じ大学の同窓生で親友でもあった Clark を推薦します。この背景には、勝が外国人であれば、どのような職業の者であっても教員として採用し、教授能力もなく得体のしれない外国人が採用されていた風潮を知っていたからでした。勝は、『きちんとした教育を受けた、専門の紳士』で『生計のために教える職工や書紀』ではない『本物の教師』を求めていました。また彼らの多くが『日本人妻』を持ち、道徳的にも一夫一婦制の西洋の理念から逸脱していることもありました。さらに勝の息子、小鹿も同大学のグラマースクールで Griffis から学び、息子が尊敬する先生からの推薦であれば、間違いはないだろうとの思いもあったようです。

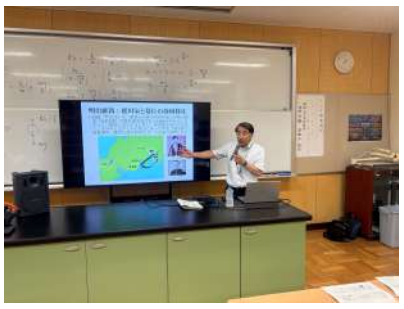
一方、Clark は、日本で『お雇い外国人』の招聘を進めていたフルベッキに日本に行くための依頼の手紙を出しますが、よい回答が得られません。その上、赴任先も決まらない状況で Clark はついに日本に行くための出発準備を始めてしまいます。渡航費用や実験用の化学薬品と実験道具を購入する費用を父親から借りて購入し、準備に勤しむなか 1971(明治 4)年 9 月 12 日、Clark のもとに親友 Griffis からの手紙が届きます。こうして彼は、赴任先が静岡であり、静岡学問所で働くことが決まります。10 月 25 日、横浜に到着後勝小鹿の紹介状を携えて東京滞在中の勝のもとを訪ね、月給 300 ドルで 3 年の契約書を取り交わすことになりますが、宗教上の問題から契約書にすぐにサインをしませんでした。なぜなら在職中は『宗教ノ事ヲ説クを不免(ゆるさず)』との一文があったからです。敬虔な Christian であった Clark は、『キリスト教徒が、三年間も異教徒の中に生活して、自分の心に密接な問題に完全に沈黙を守ることは不可能だ』と訴えたところ、3 日後に契約書にある『キリスト教教示禁止の条項』を削除するとの回答を得ました。この背景には息子を留学させていた岩倉具視や勝海舟の意向が働いたものと思われます。またこの契約条項について、Griffis は受け入れるべきとの意見を Clark に伝え対立します。Griffis は、日本からの帰国後、日本についての多くの著書を発表していますが、研究者としての立場から異教の国日本をよく観察しています。信仰に燃え、布教のために来日したいと考えていた Clark とは考え方が異なるのも面白い点です。Clark よりも 6 歳年上の Griffis の方が日本の本質をよく捕らえようとしていた様子が窺えます。

さて、その Griffis ですが、福井藩の明新館で教えていた時に本校と関係のある人物を教えていたことが分かりました。校庭にある『三本の知恵の樹』の一つ、イチョウの木ですが、この木は、平瀬作五郎が『イチョウの精子』を発見したものから株分けしていただいたものです。作五郎は、Griffis から明新館時代に Griffis に学んでいます。本校のイチョウの木を眺める時、Griffis と Clark のつながりが見えてくるようで感慨深い気持ちになります。

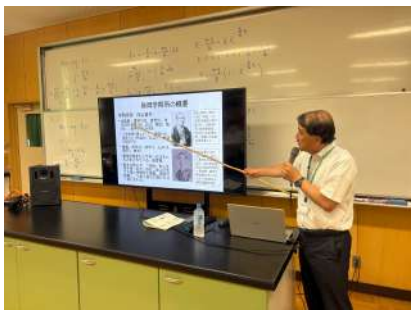
いよいよ開講です。



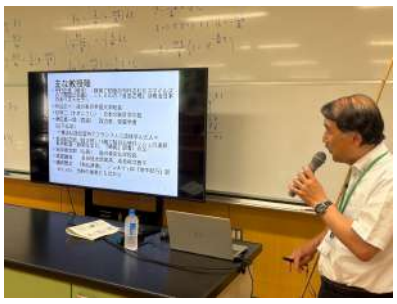
E.W.Clark について説明をしています。



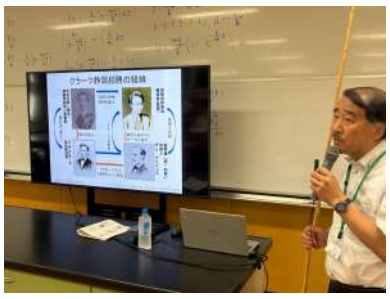
徳川家と幕臣の移住について説明しています。



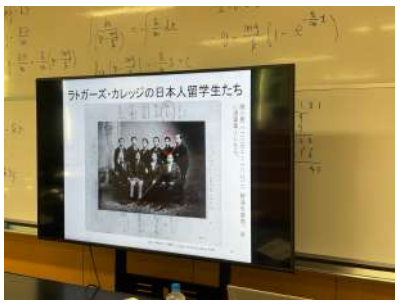
静岡学問所についての説明です。学制の発布により廃校にならなければ、東大は静岡にあったはずです。



静岡学問所には、当時の日本の頭脳ともいわれる教授陣が集まっていました。



府中駿府藩が Clark を招聘した経緯について説明しています。




Rutgers University の日本人留学生たちです。

平瀬作五郎博士について説明しています。本校のイチョウの樹にゆかりの人物です。